

学 年	教科等	題材名	日 時
第 6 学年	家庭科	見つけよう！自分好みのすずしく快適な着方	令和 6 年 7 月 8 日(月)

1 本時の目標

衣服は日光から身体を守ってくれる等の働きがあることに気づき、状況に応じた涼しく快適な日常着の着方を考え、表現することができる。

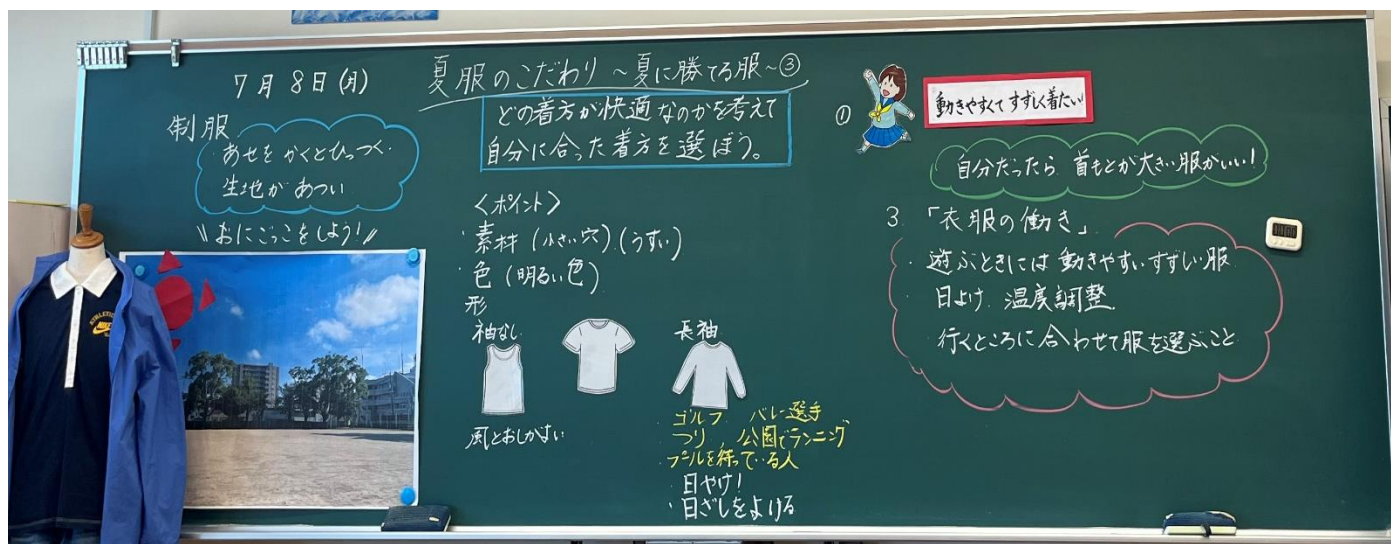
2 指導過程

学習活動及び学習内容（★は評価にかかわるもの）	「自律的に学ぶ」ための手立て
1 前時の実験結果を基に選んできた私服について話し合い、本時のめあてを設定する。 ○ 私服について ・「袖口が広くて、風通しがよい服を持ってきた」 ・「日光から身体を守るために、長袖を持ってきた」 ○ 本時のめあて どの着方がすずしく快適なのかを考えて、自分に合った着方を見つけよう。 2 袖なし、半袖、長袖のよさについて対話する。 ○ 理由（例）  袖口が広くて、 風通しがよいから。  袖口の広がり や、袖の長さが丁 度よいから。  日光から身体 を守ってくれそ うだから。 3 袖なし、半袖、長袖のよさについて体験する。 ○ 袖なし ・「風を直接感じる事ができて、涼しい。」 等 ○ 半袖 ・「肩は日差しから守られているけど、風を直接感じることもできて丁度よい。」 等 ○ 長袖 ・「日差しの暑さを感じにくかった。」 等 4 自分が選んできた私服を見直す。（★） ○ 私服の見直し ・「半袖がいいと思っていたけど、はじめは長袖を着て日光から身体を守って、暑くなってきたときには、脱げるようにしようかな。」 ・「長袖のよさも分かったけど、やっぱり半袖の方が汗をすぐに拭くことができるし、風通しもよくて、自分には合っていると思う。」 5 本時の学習をふりかえる。 ○ ふりかえり（例） 暑い日に長袖を着る意味が分からなかったけど、長袖を着ることで、日差しから身体を守ることができて、快適になることが分かった。でも僕は、天気の良い運動場で遊ぶなら、半袖で風通しのよい服を着たいな。	○ 次時に、実際に本時の最後に決定した服を着て、運動場で過ごすことを伝えることで、目的意識を明確にし、本時のゴールイメージをもつことができるようにする。 ○ 天気のよい日に運動場で過ごすときの私服を見比べる活動を設定することで、袖なし・半袖・長袖と衣服の形の違いに目を向け、本時のめあてを設定することができるようにする。 ○ 涼しく着るためには、袖が短い服がよいと思っている子どもに、長袖を着る子どもがいることを伝えることで、衣服の働きについて無意識になっていたことを意識できるようにする。 ○ 子どもが選んできた衣服のよさと理由について対話させることで、衣服の働きを意識しながら、涼しく着るための視点を増やすことができるようにする。 ○ ライト（日差し）、扇風機（風）等を準備し模擬体験できる場を設定したり、「ベランダ等で体験しながら解決したい。」という子どもの思いを認めたりすることで、自分に合った解決方法を選択することができるようにする。 ○ どのように着たいのかについて仲間と意見を共有した後に、私服の見直しを行わせることで、仲間の立場に立ちながら、涼しく着るための視点を増やすことができるようにする。 ○ 本時のふりかえりのキーワードを「衣服の働き」とすることで、涼しく着るための視点が増えたことを自覚したうえで、自分に合った着方を考えることができるようにする。

3 本時の評価規準

衣服は日光から身体を守ってくれる等の働きがあることに気づき、状況に応じた涼しく快適な日常着の着方を考え、表現している。
(思考・判断・表現)【記述分析・発言分析】

4 板書 等



【写真1：日差しを体験する姿】



【写真2：衣服を実際に触っている姿】



【写真3：対話をとおして服を見つめ直す姿】

5 指導講評

【指導講評】

宮崎大学 伊波 富久美 教授

○ 子どもにとって必要感のある対話を生むためには、多様性（着方に違いがあることにめを向けること）が必要である。本時では、多様性を生じる場面が3つあった。1つめは、衣服の選び方（形・色・素材等）である。2つめは、衣服機能（保健衛生的な着方・身体防護等）の着目の仕方である。3つめは、子どもの感じ方の違いである。例えば、同じ服を着ていても、「涼しい」と感じるかどうかは人それぞれ違ってくる。同じ服を子どもに着せて、どのくらい涼しいかについて数値化させることで、人によって感じ方が違うことに気付かせることができたのではないだろうか。家庭科は、このような多様性を生かし、子どもにとって必要感のある対話をしながら学んでいくことが重要だと考える。

宮崎県教育研修センター 竹野 弥生 指導主事

○ 本時は、子どもが「～のために、〇〇な服を着たい」という自分の思いをもちながら、衣服を選び直すという展開であった。本題材の学ぶべきポイントの1つに、状況に応じた日常着の着方がある。より多くの状況を設定したうえで、「～のために、〇〇な服を着たい」という子どもの思いを引き出すとより本題材のねらいに迫ることができたのではないかと考える。

6 考察

○ 本時では、「晴天の運動場でおにごっこをする」という限定された場面であったことから、「動きやすい服を着たい」という思いをもつ子どもが多かった。そのため、着方に違いが生まれにくく、対話の必要性を感じにくかった。子ども一人一人が、運動場に行くときどのようなことが起きそうかを（怪我をしそう、汗をたくさんかきそうなど）予想し、どう着たいかを考えさせることで、限定された場面であっても、子どもがどう着たいかについて多様性を生むことができたのではないかと考える。子どもが対話の必要性を感じながら、対話のなかで互いの違いを受け入れ合い、着方についての視点を増やすことが重要である。